教育予算増、実効ある長時間過密労働解消施策を

対都定員・教育予算要請

7月16日、都教組は都教委に対して「2026年度定員・教育予算に関する要求書」を提出し要請しました。

要求書手交（写真）後のあいさつで加藤裕子委員長は、改定給特法には、残業代不支給、在校等時間を30時間程度等とあるが、働かせ放題を放置している内容だと指摘しました。長時間労働解消には、労働基準法による時間外勤務手当の支給、授業時数の削減、教職定数増が必要であり、現場は教員不足や病休者増等、深刻な状況にあって、多忙化が進行していると訴えました。また、教育予算増や30人以下学級の実現を強く要望。さらに、地域手当の不均衡や婦人科検診の多摩島しょ格差解消のためにも、都教組要求に基づいた予算編成を行うよう強く求めました。続いて、栗原隆充副委員長が要求書の趣旨説明を行いました。

これに対し、都教委からは「さまざまな要望を伺った。内部努力を一層徹底し不断の自律的な改革を推進しながら、次代を担う子どもたちを育成するためにも、必要な教育予算の確保に努めていく」との回答がありました。

回答を受けて高草木直子書記長は、労働環境の改善は、教職員志望者増や未配置解消だけでなく、豊かな教育につながると主張し、都教組要求に基づいた定員・教育予算編成を強く要請し、まとめとしました。都教委から「要請は関係各部署に伝える」との説明があり、要請を終えました。

ゆきとどいた教育を求める署名スタート

少人数学級、教育の無償化、教職員定数増を

7月4日、「ゆきとどいた教育を求める全国署名スタート集会」が開催されました。

午前中は、意思統一集会が行われ、国会議員も参加しました。集会後、議員会館や省庁への要請行動がとりくまれ、午後は星稜会館で集会が行われました。

基調報告後、奨学金の会会長・千葉大学名誉教授の三輪定宣さんと公立校教員、私立校教員の3名が「無償教育の意義と展望」と題してシンポジウムを行いました。（写真）無償教育をめぐる歴史、可能性、展望、そして分断を乗り越えて公私ともに無償教育を求めていくことの大切さについて意見交流を行いました。その後、全国各地の運動団体が目標等をアピールしました。

1989年以来35年間で、全国の保護者、高校生、地域、教職員が力を合わせて集めた署名は4億8千万筆を超えました。長年積み重ねてきたとりくみにより、今年度、国の責任による小学校全学年での35人以下学級が完成、また特別支援学校の「設置基準」策定等が実現しました。中学校全学年における35人以下学級の早期実現、高校も含めたすべての学校で「20人学級」を展望した少人数学級のさらなる前進、教職員未配置の解消等、教育条件改善に向けて実現するべき課題はたくさんあります。

都教組は今年も「ゆきとどいた教育を求める全国署名」（対国）、「東京のすべての子どもたちにゆきとどいた教育を求める請願署名」（対都）にとりくみます。教育条件の抜本的な改善を求め、11月末をめどにそれぞれ3万筆を目標に全力でとりくみます。職場だけでなく保護者や地域、家族や友人、知人にも大きくひろげましょう。

原水爆禁止世界大会2025

長崎大会

被爆者から直接話を聞ける最後の世代ができること

8月7日から9日の3日間、「原水爆禁止世界大会2025長崎大会」が開催されました。「被爆体験の継承と未来 - 被爆80年長崎のつどい」では、日本原水爆被害者団体協議会の田中熙巳さんをはじめ、被爆者の方々が被爆の実相を話しました。海外からの参加者は、話が終わると一斉に席から立ちあがり拍手を送りました。

夜の「教職員平和のつどい」（写真）では、平和学習の実践報告を交流。朝のホームルームを使い、生徒に「核保有国の核弾頭数の推移」の動画を見せ、今できることを共に考える実践等の紹介がありました。

2日目に行われた分科会「青年のひろば」の前段では、原水爆禁止日本協議会の代表理事高草木博さんから、世界を動かしてきた被爆体験の継承・反核平和運動のお話があり、その後、被爆者の今道忍さんの話を聞きました。被爆当時は8歳でしたが、押し入れに一人で隠れて避難していた時の恐怖は今でも忘れられないそうです。

グループ交流では、「今までは防衛のために核保有が必要だと思っていたけれど、被爆者の方や参加者の話を聞いて考えが変わった」という大学生の声を聞いて、対話の大切さを感じました。

3日目の「ナガサキデー集会」には、現地3200人、オンライン700人の参加があり、「核兵器の完全廃絶に向けて今こそ行動に立ち上がろう」と誓い合いました。

（書記次長　白根　里美）

新聞 都教組

発行所
東京都千代田区二番町12-1
エデュカス東京（全国教育文化会館）
東京都教職員組合
電話03（3230）3891

1部120円（郵送料別）
組合員の購読料は組合費に含む

都教組ホームページ
https://www.tokyouso.jp/

E-mail:tokyoso@educas.jp

Information

人事異動は9月・10月のとりくみが鍵

人事異動要求を実現するには、校長との中間面接等で、しっかり事情や要望を伝えるとともに、各支部・地区協役員とともに、一緒にとりくむことが重要です。

春流

夏休みの帰省の楽しみの一つに、甥や姪の成長を見ることがある。リモートで顔を見たり、話したりすることはできるが、やはり年に1回会えるか会えないかの顔合わせは楽しみだ。数日間実家で遊んだだけなのに、別れのときはいつも泣きながら見送ってくれた甥は、数年前から見送りに出てこなくなった。後で聞くと、見送るのが悲しすぎて出てこられなくなったのだとか。照れくさいがそんなになつかれているのかと思うとちょっと嬉しかった▼そんな甥も小学校高学年になった。夏休みの宿題の作文を教えてほしいと原稿用紙と構成案を書いた紙を持って頼みに来た。背後にパパ・ママの期待の視線を感じた。小学生には難しいテーマの作文コンクール。教えすぎてはいけないが、引き受けた以上は役に立たなくてはという義務感もあり、今までにないくらい気を遣う作文指導になった▼この夏、甥は駅まで見送りに来てくれた。これまで見送りに出てこなかったことについては「そんなこともあったねー」という感じであっけらかんとしていた。ちょっとお兄さんでドライな感じが微笑ましく思えた。その妹の姪はこれまで駅まで見送りに来てくれていたが、この夏は来てくれなかった。後で聞くと、私たちが帰ってしまうのが悲しすぎて、その日も翌朝も泣いていたのだとか。あと数年は「おじさん」をさせてもらえそうだ。（丸）